

## 研究倫理を学生にどのように伝えるのか？

FD特別委員会 安居 光國 くらし環境系領域

平成27年3月12日、講師に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・池田光穂教授を迎え、FD講演会「楽しい研究倫理入門」が催されました。副題として「研究が楽しい現場でのコミュニケーションデザイン」とあるように、無味乾燥な研究倫理ルールに対し、人間的な解決法のお話をいただきました。ここでは、質疑応答を交えて講演内容を紹介させていただきます。



講演会風景

### 【研究倫理には顔がない】

講演の冒頭に「研究倫理はどんな表情をしているのか」と問いかけられ、聴衆は困惑をしました。説明を伺うと、研究倫理は研究者が一律に守るべきルールであり、人間的な個性を持っていない。研究倫理は、研究者を冷酷に見つめる目であるということです。なるほど、ルールが個々の研究者の立場に応じて変幻自在ならルールと言えなくなるのでしょうか。

### 【研究者には顔がある】

研究者も研究も顔と言う個性をもっています。研究テーマに類似性があっても、スタイルが違えば千差万別です。しかし、研究倫理は研究の個性や研究者自身の内面的な倫理性を問うものではありません。研究をどのように行なうのか、行なったのかという手続きや方法を問うものです。そのため、自分では良いと思ったことでも第三者に判断を仰げば不適切となる場合があります。その時は、研究者は反省し、謝罪しなければなりません。つまり、顔のある研究はon-goingに顔のない研究倫理に照らし合わせなければならないのです。

### 【形骸化しないために】

研究者自身が判断し不正を行わないためには、まずルールを学ばなければなりません。何が許され、何が許されないかという研究倫理です。しかし、十人十色の研究に対し一律

に規則は網羅できないため、研究者は第三者の判断を待つことなく、みずから己に規則を適応できるように規則の本質を理解しなければなりません。一方、管理側にもマニュアル化による形骸化を防ぐ努力が求められます。

### 【指導する学生には】

これまでの議論は、一人前の研究者に適応できますが、未成熟な学生には困難なことです。そのため、学生には2つの視点が必要になります。(1) 研究不正を犯すと不利益があることを理解し、不正の影響が学生自身だけでなく、指導教員をはじめとしたソサイエティ全体に及ぶことを知ります。(2) 不正に対する誘惑、葛藤に襲われたとき、弱い学生だけで解決しようとしめない、躊躇しないで相談や打ち明けることです。学生と教員のコミュニケーションが肝要です。一方、教員はパワハラ、アカハラが研究不正のトリガーだと自戒し、学生とのよい環境作りを心がけます。端的に言うと『対話があれば、研究不正は防がれる』と締めくくられました。



講演会風景

### 池田光穂氏 略歴

1980年 鹿児島大学理学部生物学科卒業  
 1989年 大阪大学大学院研究科博士課程社会医学専攻単位取得退学  
 1992年 東日本学園大学（現北海道医療大学）教養部助教  
 1994年 熊本大学文学部助教  
 2002年 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授  
 2005年より大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授  
 授業科目：臨床コミュニケーション、ヒューマンコミュニケーション、セーフティネット論、認知症コミュニケーション等

# グローバル時代の大学改革セミナー参加報告

渡邊 浩太 しくみ情報系領域

平成27年3月18日、東京都のフクラシア品川クリスタルスクエアで開催された『グローバル時代の大学改革セミナー』（株式会社ベネッセコーポレーション）に参加しました。本セミナーは大学関係者を対象としており、会場を見渡した印象では、全国の国公立・私立大学から100人超の参加者がありました。内容は3部構成となっており、第1部が文部科学省高等教育局高等教育企画課 国際企画専門官 佐藤邦明氏による「グローバル化時代の大学改革に対する期待」、第2部がベルリッツ・ジャパン株式会社より「グローバル企業における人材育成の課題と求められる育成プログラム」、第3部が株式会社ベネッセコーポレーションより「高校教育を取り巻く変化から高大接続をスムーズにする指導、入試改革を考える」と題された講演がありました。

第1部ではグローバル化の流れと現状の説明があり、世界中に500万人を超える日系企業の従業員がいる現状を踏まえてグローバル人材の育成が必須であることが説明されました。グローバル人材には語学力は無論のこと、チャレンジ精神や様々な国籍の人と統括するための多様性のマネジメントの能力が求められ、留学生の活用、社員の多国籍化が必要となります。留学生の増加に関しては欧州のポロニヤ・プロセス、日中韓によるCAMPUS Asia等の取り組みが進んでいます。日本の大学の現状として、内向きの思考の学生が増えており憂慮すべき事態ですが、一方で、日本人留学生の数はここにきて増加傾向になってきており明るい兆しも見られます。留学先として中国が増加しており、学生も経済情勢に敏感であることがうかがわれます。外国人留学生の内訳として中国・韓国からの留学生が減少し、そのかわり、東南アジアからの留学生が増加しています。

英語教育の面でいえば、大学の外国語の授業に対して役立っていないと思っている学生が60%に達して突出していること、世界的に国際共著論文が増加しているが、その流れに日本は取り残されていることが説明されました。教育だけでなく、研究の分野でも、日本の大学のグローバル化の対応が遅れている印象を受けました。

第2部ではベルリッツ・ジャパンで実施されている英語教育、グローバル人材育成事例の紹介がありました。企業が求める人材は当然ながら業種、役職、職務によっても異なります。共通して言えることは、グローバル人材の育成はTOEICの点数をアップといった単純な語学力のアップだけではだめで、文化の違いによる考え方の違いを理解することが重要になります。大学での導入事例として、慶應義塾大

学 湘南藤沢キャンパスと東京工業大学 情報生命博士教育院での事例が紹介され、前者では、リサーチディスカッション・プレゼンテーションを通して英語力を鍛える科目を導入し、TOEFLのスコアがアップした事例が紹介されました。

第3部では主に高大連携に着目し、近年の高校での英語教育の変化とそれに対応した大学の連携についての講演がありました。高校では新教育課程への移行により、授業中での英語の使用が大幅に増加し、評価方法としてスピーキングテストの導入、コミュニケーション力を測るGTEC for STUDENTSの受験者数が増加していることが説明されました。このように中高の英語教育が「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を重視する方向に変化しているのに対して、従前の大学入試では「読む」に特化した試験が実施されており、両者の間に乖離が生じています。これを改善していく方策として、4技能を評価する各種の資格・検定試験の導入事例が紹介されました。また、SGH（スーパーグローバルハイスクール）、国際バカロレア等のグローバル教育に力を入れた高校が全国の10%に達しています。この中でSGHでは、グローバルな社会課題やビジネス課題を設定し、探究活動を通して次世代の人材に必要な資質を身に付ける教育が行われており、それをサポートする外国人教員や留学生の派遣、高大連携プログラムの提供等の大学との連携が求められています。SGHの目標設定シートには大学在籍中に留学や海外研修した卒業生の数を記入する欄があり、大学の留学実績がより重要になってきています。このほかにも意欲的で主体的な学習意欲を持つ学生を獲得するための入試方法の改革事例等が報告されました。本学でも高大連携評議会等を開催していますが、英語教育に関するテーマを取り上げるのも良いのではないかと思います。

## ※SGH指定校

全国では56校が指定されており、道内には3校ある。  
(北海道登別明日中等教育学校・札幌開成高等学校・札幌聖心女子学院高等学校)

## 編集後記

平成26年度は、FD特別委員会としてアクティブ・ラーニングを中心に取り組み、年度末にFDだより第24号を発行したところではありますが、緊急課題である「研究倫理」に関するFD講演会を3月に開催しましたので、グローバル時代の大学改革セミナーの参加報告を併せて年度早々にFDだよりを発行することにしました。

平成27年度もFDワークショップやFD講演会を予定しておりますのでご参加とご協力をお願いいたします。